タイトル：2023 年度 教育セミナー（第 19 回）
日時：2023 年 9 月 21 日（木）～24 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

萩原 優太（東京外国語大学大学院）

私は本セミナーでは、ポスターセッションで参加させていただきました。

私が取り組んでいる研究を一度なんらかの形にして、聞いてくださった方々からリアクションをいただきたいという思いで、当初参加を表明しました。また、私の所属機関で人生初めての成果発表をすることで、今後外部での発表をする際のハードルを下げようという目的もありました。実のところ、とにかく締め切りまでに成果物を仕上げることに追われていましたが、蓋を開けてみれば発表時間の関係でまだまだ研究内容を伝えきれていないところも多く、受講生発表枠で応募しておけばよかったと後悔しました。

とはいえ、受講生の皆様、先生方から、公式・非公式を問わず多様なご意見を頂戴できました。自身の研究をどう学際的に結びつけるか、という重大な課題を議論することができた一方で、とりあえずは修士課程に進んで春から夏までにかけて自分のやってきたことが間違ってはいなかったこともわかり、自信にも繋がりました。今回の発表をもとに、これから淡々と研究に勤しんでいければと思っております。

今回の参加者には歴史学をディシプリンとされる方が多く、門外漢な私にとって果たして 4 日間も乗り切れるか実のところ心配でした。とはいえ、中東やイスラームといった基盤を共有している方々による発表は、私自身の知見を広げ、アイデアを吸収する場になったことには間違いありません。私はディシプリンや方法論に関してまだ決めきれていないところがあるため、性質の様々な発表を聞いて刺激を受けました。また、若手研究者間での人脈を作ることができたことも、本セミナーでの収穫でした。

先生方の講義に関しては、個人的には藤屋先生の講義が最も印象に残っています。人道的関心を基軸に現場とアカデミアを横断する研究人生や、講義の際に出てきた Publication is advocacy という言葉が、私にとって一つの人生のモデルケースに見えました。このように、先生方の講義は専門的なお話だけでなく、研究者としての姿勢や、中東やイスラームに関する研究をする上で前提として必要な議論など、大変示唆に富み、参考になるものでした。

最後に、準備に奔走くださいました AA 研職員の皆様、先生方、受講生の皆様に御礼申し上げます。